（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	Kritdikorn Wongswangpanich
論文題目	Sick Kingdom: The Role and Politics of Thai Health Care in the Domination of Bhumibol's Narrative （病める王国 ―タイ王党派の物語りの政治―）		

（論文内容の要旨）

タイの現代政治は国王を中心として展開してきた。この政治体制を支える要因として重要なのは、プーミポン国王(在位1946～2016年)を「お父さん」として崇敬の念と親近感を抱くように誘う物語りであった。この物語りに感化・教化されて、体制を支える大衆基盤となってきた人々がいる。彼らは、2006年以後非民主的な政権交代を支持する発言や行動を繰り返すようになって、民主政治支持者からサリム(salim)と呼ばれた。どちらかといえば高学歴の富裕層が多いサリムが、総選挙を拒否し、クーデタを歓迎するのはなぜか。サリムは、世界基準に照らし合わせると非合理的ながら、当人たちは合理的と自負している。本論文は、サリムの合理性を理解することを目的としている。

本論文は、歴史を4つの時期に分けて考察している。第一期には、ラーマ4世（在位1851-1868）が即位前に27年間僧籍にあるうちにパーリ語経典への回帰を主張し、タムマユット派を興した。王は少数派の同派を仏教界の中心に位置づけて、君主制、仏教、科学的な合理性を結びつけるタイの物語構造を生み出した。

第二期は2つの時期に分かれる。前半には、冷戦下での国王、軍隊、そしてアメリカの協調関係が、「お父さんから」という物語と「サリム原理主義」を生み出した。国王は医療団の派遣やダムの建設などの物質的な利益を提供し、慈悲の施しへの感謝の念を民衆に抱かせた。

後半は、1970年代に始まった。医学界の大物プラウェートが、改革派仏教僧の教えを近代科学の文脈に位置づけて全国へ広めた。その過程で、民主主義や科学的知識は仏教的な価値へと翻案された。国王をモデルとした無我の「善人政治」（道徳的な人物による支配）を称揚し、「お父さんのように」行動するよう国民に指南した。これは教義の政治であり、「進歩的サリム」という新しいタイプが生まれた。サリム原理主義が「人物崇拝」ならば、進歩的サリムは「教義崇拝」であった。

第三期は1990年代から2010年までであり、プーミポン国王が全国に勢威を及ぼした。

プーミポンの物語りには、誰もが語り部になれるという強みがあった。進歩派であれば、無我という国王の教義に従えばよい。原理主義であれば、国王の慈悲に報いる善行をすればよい。上からの圧力がなくても、「お父さんのために」皆が勝手に語ってくれるという段階であった。しかし2000年代に入ると、タックシンという挑戦者が登場した。物質的な恩恵の提供では、効率性と民主的正当性でタックシンが上回り、プーミポンの物語りに打撃を与えた。とりわけ国民皆保健医療制度は衝撃が大きかった。タックシンは2006年のクーデタで失脚させられたが、その後も国政選挙で勝利を続けた。

そこでプーミポンを他のものに置き換えようと試みる第四期が始まった。問題を解決するために「お父さんの代替」が試みられ、王党派は、プーミポン国王に替わるものとして、プラウェートが発案した「プラチャーラット政策」を採用した。政府が企業と協力して物質的な利益を庶民に提供するこの政策は、2019年総選挙で王党派の政党の政権獲得に寄与した。しかし、2016年に即位した新国王は無我とはほど遠い人物であった。新未来党（FFP）が、進歩派サリムが求める善人政治の教義に合致する存在として浮上し、タックシンを封じ込めようとする選挙制度の助けも受けて、第3党になった。サリムの一部を奪い取り、民主主義を重視するFFPは、脅威と見なされ、2020年に解党処分を受けた。この処分は、若者と進歩派サリムの反発を招いて、民衆の波状デモを引き起こした。これはプーミポンの物語りに突きつけられたもっとも厳しい挑戦であった。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

タイでは、君主が大きな権威を背景として政治に関与する政治体制が続いてきた。この体制を守るために、2006年以後軍隊や裁判所が非民主的な政権交代を繰り返すようになった。本論文はこの体制に関する研究であり、以下の点で東南アジア地域研究への学術的貢献を高く評価できる。

まず、本論文は、視角やアプローチが独創的で斬新である。近年は9世王プーミポン(在位1946～2016年)を主人公とする政治体制研究が増えてきた。本論文はそれらと一線を画して、サリム(salim)と総称される人々を対象とする。サリムは君主制の大衆基盤であり、非民主的政権交代を歓迎する。サリムの行動を明解に説明することは容易ではなく、サリムを俯瞰して分析した先行研究は存在しない。本論文は斬新なアプローチを用いてサリムに挑んだ。（1）多くの観察者が注目しがちなデモ集会などの行動ではなく、サリムの思考様式に注目した。（2）サリムの思考様式を解明するために、君主制・仏教・科学(医学)の関係の移り変わりを丹念にたどり、従来のタイ政治研究では見過ごされがちであった医療に深く切り込んだ。

次に、こうしたアプローチは重要な発見につながった。第一に、サリムにとってプーミポンとは何者なのか。1つは物質的な恩恵を慈悲として施す恩人、もう1つは仏徳を備えた善人である。いずれもタイ人の仏教観に裏打ちされた理想像であった。本論文は、従来一括りにされてきたサリムを、理想像に応じて「サリム原理主義」と「進歩的サリム」に二分した。この二分はタイ政治の解釈に大いに役立つ。

第二に、2つのサリムの登場背景の違いを明らかにした。原理派については、9世王への報恩の念から登場したことがよく知られている。他方、進歩派については、これまで歴としなかった。本論文は9世王が理想の善人だという言説を医療関係者の全国ネットワークを通じてプラウェート医師が広めたことを明らかにした。これは文民の間では医療従事者が王党派の中核勢力となる主因であった。

第三に、サリムに転向者が生まれた理由を思考様式に即して究明した。進歩派サリムの理想は生身の9世王ではなく9世王が体現していると思われる善人であった。仏徳の乏しい10世王が即位すると、進歩派は新未来党(FFP)に新たな理想像を見出して投票した。これがタイで最古の政党である民主党が2019年に結党以来（ボイコット時を除いて）初めて総選挙で首都の議席をすべて失う理由となったことを明らかにした。FFPが2020年に解党処分

を受けると、進歩派は若者と一緒になって、軍事政権への抗議運動に参加した。

最後に、本論文は新たな事実の発見でも貴重な学術的貢献をしている。数例を挙げると、（1）9世王は辺境地域へ医療団を派遣した。著者は医療団に加わった医師への聞き取りから、需要が大きな内科医ではなく、眼科医と歯科医が医療団では優先されていたことを知り、理由を次のように解釈した。歯科や眼科は治療効果が目に見えた。しかも治療後の患者は歩く宣伝係となった。重要なのは、慈悲の施主としての国王の人気が意図した結果であったという点である。（2）1997年以後国是となっている9世王発案の「知足経済」哲学が、プラウェート医師が1974年に発表した雑誌論文に由来していたことを発見した。

以上の通り、本論文は、タイ現代政治において脱民主化の大衆基盤となっているサリムの役割を大胆かつ丁寧に解析することで、君主制と政治の関わりを明晰に分析し、多くの新たな知見を提供する秀作であり、タイ地域研究への学術的貢献を高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年2月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。